

5月30日 協調学習アクションリサーチプロジェクト
半日ワークショップ ご参加の皆様へ

2009年6月16日

ご報告

東京大学大学発教育支援コンソーシアム
副機構長 三宅なほみ
スタッフ 相田紘孝

5月30日には、あいにくの曇天の中、協調学習体験型半日ワークショップにご参加いただきありがとうございました。ワークショップ中に皆様にご書いていただいたワークノートの整理が終わりましたので、簡単な分析の結果と一緒に郵送にて返却させていただきます。分析結果が今後の皆様の活動の参考としてお役に立てば幸いです。今回の分析は、「手」のワークショップ企画運営を担当した相田紘孝(東京大学大学院教育学研究科学校教育高度化専攻教職開発コース博士課程)が担当いたしました。

次のページ以降では、皆様のワークノート进行分析させていただいた中から、いくつかご報告します。

CoREF では今後もワークショップやシンポジウムを予定しております。予定や内容の告知はCoREFのWebサイト <http://coref.u-tokyo.ac.jp/>にて行います。次回は6月28日(日)13:00-17:30に「学んでどうということ？ 一学びの科学 基礎の基礎」と題して、東京大学本郷キャンパス福武ラーニング・スタジオにて行います。5月30日(土)の最後にご案内した日時・場所と異なりますので、ご注意下さい。またお目にかかれる折を楽しみにしております。

まず、最初に書いていただいた『手』と聞いて連想するもの』と最後に書いていただいた『手』と聞いて今思いつくもの』とについて、五つのカテゴリを作り(カテゴリの内容については、グラフのキャプションをご覧ください)、各カテゴリの内容に言及している人数を重複を許して数えて比べました。すると、以下の図1のグラフのように、最初は具体的な物事や行為・性質・関係についての記述を挙げる方が多かったのですが、最後には「手」についての見方・考え方や授業・教材についての記述をされる方が多くなりました。今回のテーマである「手」は、身近すぎることもあって捉えにくいところがあったのではないかと思います。にもかかわらず、ワークショップ終了時には具体的な物事への言及が大幅に減り、教材としての可能性を探っていただけたことは主催者としては大変ありがたいことでした。

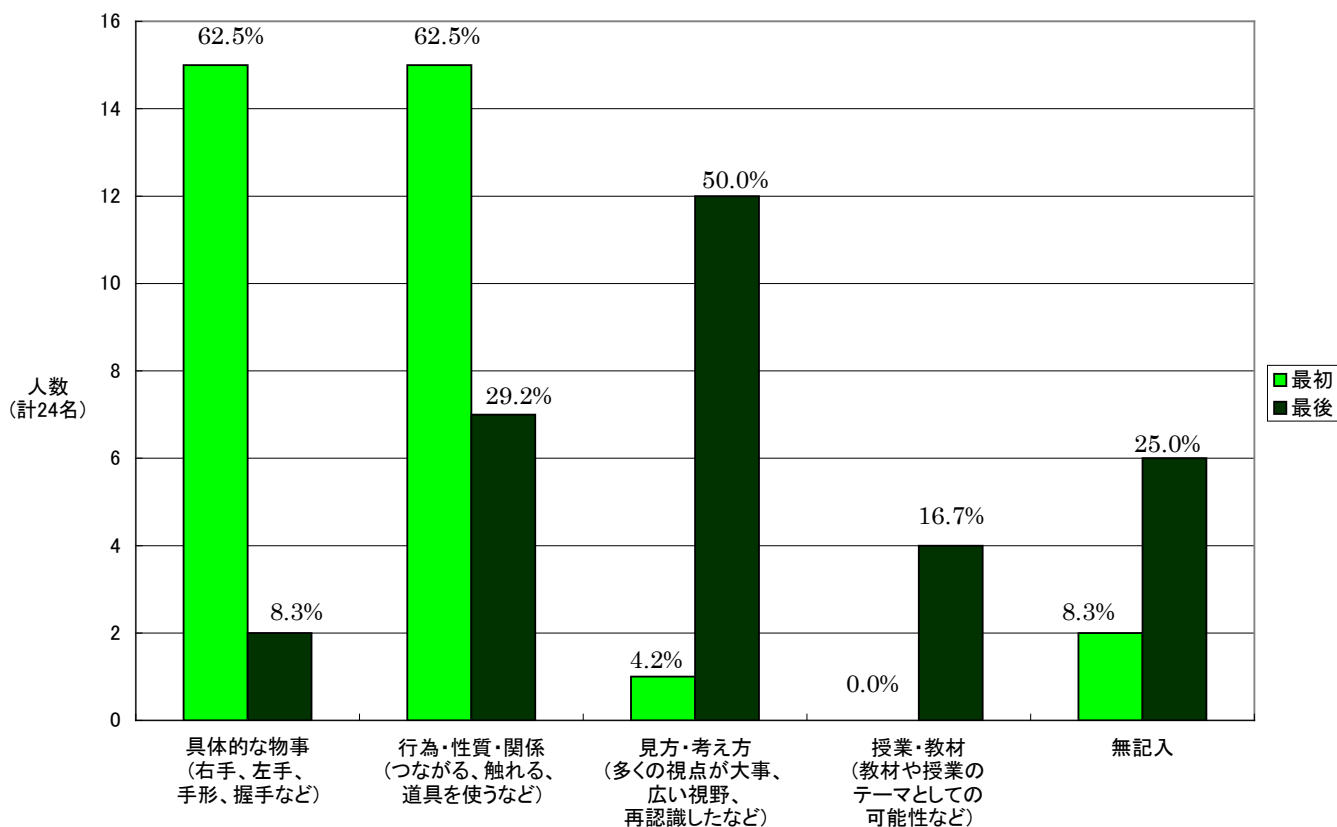


図1 「手」についての質問に対する記述の内容がワークショップの前後でどのように変化したのかを示すグラフ。明るい緑はワークショップ前における言及数を、濃い緑はワークショップ後における言及数を表す。

次に、エキスパート活動の後のアンケートで「エキスパート活動の中でおもしろかったこと」についてお答えいただいた内容について、四つのカテゴリーを作り、重複を許して分類して数えてみました。すると、以下の図2のグラフに示されているように、エキスパートグループでの話し合いそのものについての記述をされた方の数が、グループの中で具体的に話された内容についての記述をされた方の数を上回っていることが分かりました。エキスパート活動は、資料の内容の理解を協調的に行なう活動です。しかし、皆様の記述からは、この活動がたくさんの考え方や視点を交流して自分の考え方を深めることにつながるのではないかなど、今回の体験を教室での学習活動に結び付けて考えた方が相当数いらっしゃったことが伺えます。

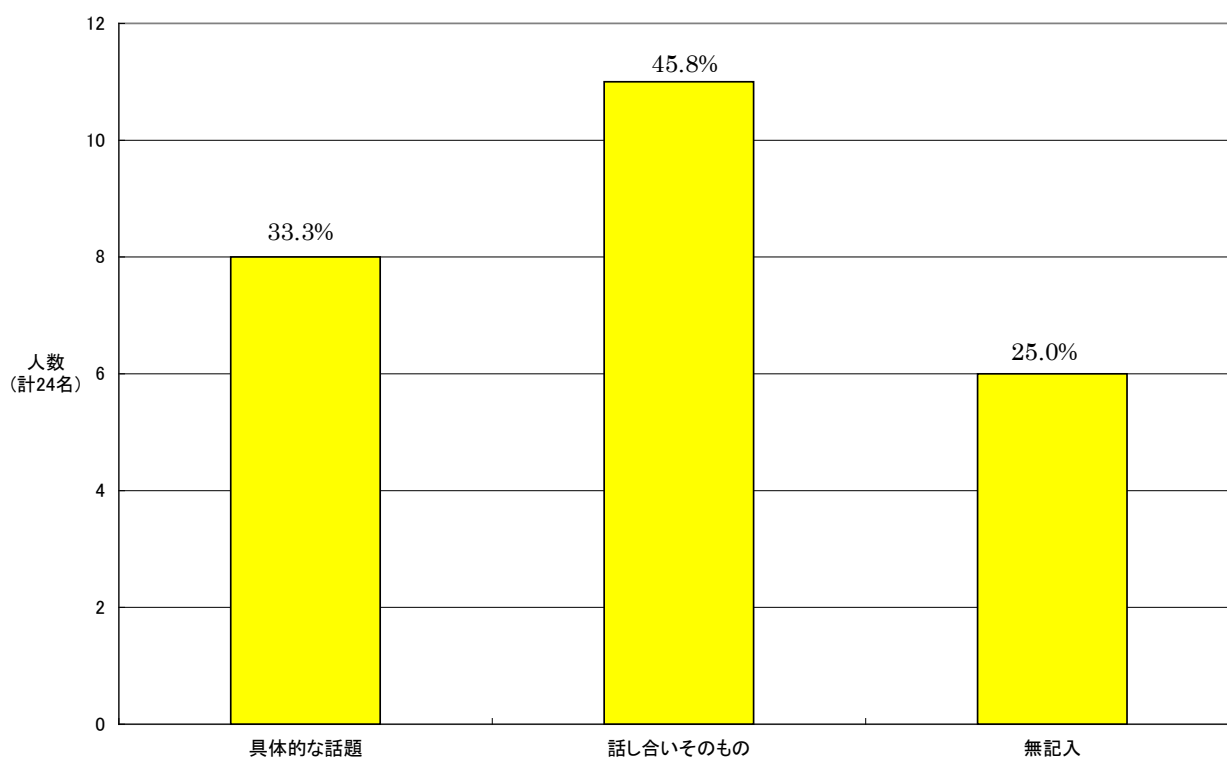


図2 エキスパート活動で面白かったことを聞く質問に対する答の内容を分類したグラフ。

最後に、クロストークの後で皆様に考えていただいた「もし自分が『手』を題材として授業をやるとしたらどんなことができるか？」という問いに対してお答えいただいた内容をご紹介します。いただいたお答えの中には、「手」に関係する言葉や現象を分担して調べてまとめる国語の授業、国語・図工・算数・学活など複数の教科を「手」というテーマでつなぐ活動、「手相」は本当に読めるのかを検討する授業など、自分の担当もしくは関係の深い教科に基づいた案を多くいただきました。また、ワークショップで扱った四つの視点を参考にお考えいただいた方、「多様な視点」を交流させる工夫を考えて下さった方もたくさんいらっしゃいました。

これらの中から、これはすぐに協調的な形の学習に持ち込めそうだと感じたものを3件ご紹介致します。

「手」の授業案(要約・抜粋)
高校の化学の有機化学分野における、光学異性体についての授業をエキスパート&ジグソーで行なう。右手と左手の違いについて考えさせ、「右手」と「左手」のような関係をお互いに持っている分子の組(光学異性体)があることを紹介する。四つぐらいの主題を用意してグループごとに調査し、ジグソー活動をする。
道徳の授業。からだの様々な部分の機能をグループごとに一つずつ取り上げて学ぶ。障害を持っている人のことを理解する。
スポーツのルールを考察する。手の使用の制限がスポーツごとにどう違うのか、そのルールは歴史の中でどう変化してきたか、制限があることで生まれた技術(バスケットボールのドリブルなど)にはどんなものがあるかを考える。

新しい授業が生まれるきっかけやヒントとして本ワークショップでのご経験や上記の皆様のご提案をご活用いただければ幸いです。

今回は、運営上、終わりの方が慌ただしくなってしまいました。この点は、今後の課題です。本報告書やワークショップの内容に関するご意見・ご質問がございましたら、ご遠慮なく info@coref.u-tokyo.ac.jp までお知らせ下さい。今後の参考にさせていただきたいと思っております。また、今後実際に「手」を題材に具体的な展開をお考えでしたらご連絡下さい。何かお役に立てることができれば幸いです。